

アタッチメント障害圏の子どもの集団参加支援

-ASD との比較における自己イメージの形成過程-

13016PCM 渡邊享子

I. 問題意識

1. 保育所におけるアタッチメント障害児の増加

名古屋市ではすべての保育所で障害児を受け入れ障害児と健常児がともに生活する統合保育制度を実施している。近年、保育所における障害別入所児童数において自閉症圏(ASD)の子の増加のみが突出してきており、後藤(2009)は、自閉症圏の子どもと最早期からの関係性障害を持つ子どもを区別することの難しさと必要性について論じて、実際は自閉症圏の子どもと類似の症状を示すアタッチメント障害の子どもが増加している可能性は否定できないと指摘している。青木(2014)は、アタッチメント障害の研究は現時点で診断基準の妥当性が確認されつつある段階にありデータが未だ蓄積されていない現状を指摘している。

アタッチメント形成をめぐる研究は古くからなされており、子どもの安定した成長には母子間のアタッチメント形成が重要であることは論を待たない。発達早期の虐待や養育不全などの体験が愛着の障害につながると本城(2014)は述べている。また、その症状としては被害的、攻撃的になる、あるいは引きこもる場合もあれば、他者にしがみつくと見捨てられ不安も高いなど感情の調節不全が見られると青木(2014)が述べているように、様々なパターンのあることが想定できる。

2. アタッチメント障害の子どもへの取り組み

Bion(1977)は、容器(container)と内容(contained)という概念を用いて、精神分析的な観察に基づく理論を展開しており、母親の包み込むコンテナ機能の重要性を説明している。またKohut(1985)の理論では、自己愛が健全に成長していくためには周囲の的確な反応が必要であるとし、特に褒められる体験の重要性について述べている。木村・後藤(2012)は、愛着障害の子には、愛される自分や必要とさ

れる自分というイメージの形成と確認が必要であると述べており、渡辺(2006)は、保育所が家族全体を受け止める安全基地になることで親子の愛着形成をやり直すことが大事であると述べている。保育所が、母子をともにコンテインする機能を持つことが最重要の課題だと言える。

II. 目的

ASD圏の子どもの集団参加プロセスについては、すでに先行研究(木村・後藤, 2009等)に整理されている。一方、アタッチメント障害圏の子どもたちの集団参加プロセスは、まだ模索段階である。今回の研究では以下の視点から、ASD圏の子どもとの比較し、アタッチメント障害圏の子どもの特質を検討しようとする。①集団参加プロセスの違いを明らかにする、②子どもの求めているなりたい自己イメージを明らかにする、③そこから類型化のための視点を得るとともにASD圏の子どもとアタッチメント障害圏の子どもの発達支援の方針を探る。

III. 方法

研究協力者: 県内にある保育園の5歳児クラスに通う3名の男児。

実施期間と手順: 200X年11月～200X+1年12月まで、月1～2回観察者が昼食をはさんでの5時間、関与観察しながら情報を収集した。集団活動や自由活動の時間における保育者や観察者、他児との関わりの中で言葉や表情、遊びの内容を記録した。また描画活動や作品作りにも注目し描画や作品を撮影した。

IV. 結果

1. アタッチメント障害と考えられる事例

事例1は4歳時にADHDと診断されており、攻撃性や衝動性が見られ友だちとのトラブルも多い。その際には「相手が悪い、自分は悪くない」と主張することが多く、指吸いやおもらしも見られる。年中組の2月に加配保育士が変わり、児の攻撃性や甘えを1対1で徹底的に受け

止め続け、愛着形成のやり直しをする中で嫌われる自分から愛されるよい子の自分へと自己イメージが変化していき、仲間と遊ぶことが増えていく。描画においても、年中組の前半には枠を描くなど、安心できる居場所を求めている様子だが、次第に枠を描かなくなり、安定した他者との関係性が描かれるようになる。

2. ASD と考えられる事例

診断名は構音障害であるが、多動傾向があり、室外へ出て行ってしまふことが多い。遊びや物へのこだわり、執着はあるが人への愛着はあまり見られない。年中組の2月から居場所としての特別スペースが作られると、暗くて狭い棚の下に入りこみ、室外への退避行動は減少する。年長組の後半になってから身体接触の要求が多くなるとともに、居場所を撤去されてからは再び室外へ出ることが増え、他児とのトラブルも多くなる。描画活動においては、まとまりがなくバラバラで顔のない絵ばかりであったが、少しずつ顔があらわれ始める。

3. 知的障害を伴い ASD から二次的にアタッチメント障害を抱えたと見られる事例

診断名はないが、活動意欲の低さをはじめ、発達全般に課題を残している。乗り物には興味があるが、他児と遊ばずボーッとしていることも多い。攻撃性や逸脱行動はないため、保育の上で特に支障はないと見られている。大人に対しては抱きつき、独占したがらる。描画では、年長組になっても人の顔が描けずに、混乱することもよくある。

V. 考察

1. コンテナ機能と人間関係の反応性

アタッチメント障害と考えられる事例においては、自分のための居場所が用意されることで、「ここにいてもいいんだ」という器としての家イメージができ始め、描画にも枠がなくなり、室外への退避行動も減っている。その後、自己イメージは「嫌われる自分」や「よい子の自分」と色々なものの中からどの自分を選択していけばよいか迷い、苛立つ様子も描画から見られる。しかし、加配保育士に思い切り甘え、愛着形成のし直しをしていく中で自己イメージが大きく

変化していく。それに伴って集団参加が可能になっている。アタッチメント障害の子どもは大人との関係性に対する反応性が高い。自分に向けられる眼差しの質によって自己イメージが大きく変わると考えられる。ASD が考えられる事例については、居場所であるスペースを刺激回避の場所として使用することが多く、その場所が撤去されるとまた室外への退避行動が増えている。それは、大人との関係性に対する反応というよりも、置かれた状況の特性に対する反応であり、刺激回避のための居場所が必要である。

2. アタッチメント障害児の自己イメージの生成過程と集団参加プロセスについて

ASD 圏の子どもは、拡散してバラバラな自己を徐々にまとめていく形で自己イメージを生成していく。アタッチメント障害の子どもは、第一に「家」ないし「家代理の居場所イメージ」を持つことが重要な軸となる。次に「変なもの」「嫌われる自分」という正体不明の自己というイメージを修復して、「よい子の自分」「愛される自分」というイメージを生成し、「家族団らんの中心にいる自分」の確認へと移行していく。集団参加プロセスについては、ASD 圏の子は、集団参加イメージを持っていないためゼロからの構築や、きめ細かなコーチングが必要となる。対して、アタッチメント障害圏の子は集団参加や仲間づくりの意欲は持っているが、「悪い自分」になってしまい、その自己を他児に対して転移してしまう自己対象転移のために、集団参加がうまくいかない。自己イメージの修復を内心求めているが、それは他者イメージの修復と同時並行で行われる。家族団らんのイメージをクラスの間関係に求める動きの出現が、集団参加意欲を導く転機となりうる。

3. 保育の現場における今後の課題

アタッチメント障害圏の子は、大人との関係への反応性が高い。子どもの困り感や本音に瞳を凝らして、よい子でありたいと願う子どもの潜在的な欲求を汲み取ることが、集団参加支援の基盤である。今後、事例を積み重ねて支援プロセスを整理することが求められる。